

## 三浦記念賞の榮譽に浴し

山形商工会議所常議員  
吉田 眞一郎氏



このたび栄えある三浦記念賞をいただくことになり光榮に存じます。受賞の理由に立谷川工業団地協同組合理事長として、工業団地の地域産業基盤の

確立と環境整備に積極的に取り組んだことが挙げられております。組合は主事業として簡易水道事業を運営していますが、事業開始後40年経過し老朽化が進み漏水が頻発するようになりました。そこで、悩みの種となっていた給水管の大規模交換工事に取り組み、問題解決に当たった事が強く印象に残っています。これもひとえに県、市当局、組合員の多大なる支援と協力があって成し遂げたことであり誌上を借りて感謝申し上げます。

立谷川工業団地は昭和30年代に造成を開始した歴史ある団地です。私どもの組合は1971(昭和46)年5月に、同じ団地内の機械工業、木材工業、木工の各協同組合に次いで設立されました。異業種の集まりで現在、田宮印刷、ハッピージャパン、第一貨物、小嶋源五郎本店、竹原屋本店等々24社が事業を展開。このたび優良協同組合として中小企業長官表彰を受賞しました。

吉田家について少しく紹介させていただきます

す。山形での歩みは最上義光公の時代にさかのぼります。京都春日神社神職一族であった吉田監物光晴が山形開発のため義光公に招かれ、最上家改易で帰農します。元禄年間に畑谷村から城下に出て三日町誓願寺門前で商いを始め、八文字屋の支配人格となり京都・大坂に紅花を販売。やがて十日町に屋敷(現在の山形まるごと館紅の蔵)を買い取り、上方の古着を扱う山形商人の草分けになりました。以後、財産没収、領外追放などの苦難にあったようですが、山形藩水野家時代に秋田藩との間で起きた漂着船荷の扱いをめぐる問題を、一命を賭して解決し信頼を得たということです。この辺のところは榎森伊兵衛氏の著書『山形の商人』に詳しく記されています。

当社の母体となった(株)吉田は、1890(明治23)年に吉田家第6代福平が吉田商店として紙箱製造を手掛けたのが始まりです。戦後、商号を変更し洋紙及び紙製品・文具の卸、包装資材を中心とした紙専門商社となりました。父長三郎は7代福平の4人兄弟の次男として生まれ、昭和34年に缶詰運送用の段ボールを製造していた小樽の東洋木材企業—現(株)トーモク—の勧めに従って、この業界に入りました。設立当初は山形市北町に工場を構えていましたが、リンゴなどの果物運送用から、食品加工業向け製造が中核となり始めて生産が拡大。昭和43年に立谷川工業団地に新工場を立ち上げ操業を開始しました。(株)トーモクも隣接地に工場を建設し一貫ラインで製造できるドッキング工場が完成し今日に至っています。

段ボールは時代と共に品質、機能の充実が求められています。道路事情が悪かった時代には頑丈さが優先され、食の安心・安全が求められる現在は紙粉や異物の混入を防がなければなりません。当社では製造ラインに大型の紙粉除去装置などを設置し対応しております。また、加工時の折り目や表面のひび割れによる異物混入を防ぐため、大阪市のアイロンメーカーと共同でナノレベルの蒸気を噴射する移動式スチーマーを開発、同じ悩みを持つ業界の注目を集めています。

段ボールは「製品を保護し運ぶ副資材、つまり脇役のような存在」です。しかし、なくてはならぬ地場産業と自負しています。吉田グループの社は「和を以て尊しとなす」の精神の下、受賞を機に今後より一層包装資材の分野で地域社会に貢献していく所存です。

(株)吉田段ボール代表取締役社長